

社会派詩人ヴィニー？

——「脱宗教化」から見たサン＝シモン主義との接点をめぐって——

江 島 泰 子

はじめに

ヴィニーはロマン派の詩人たちの中で、自らの芸術に最も忠実な芸術家である。彼は、友人たちの文学理論における不完全な部分、社会性に乏しい部分を最もよく感知できる人だった。新しく、より高尚で、より幅広い概念の価値を十全に理解し、それを実現できた。

これは、1831年6月30日付の『グローブ』(*Le Globe*)紙の記事からの引用である。同紙は同年1月から「サン＝シモン教義の新聞」という副題をつけて発行されていた。さらに8月からは「サン＝シモン教の新聞」と銘打たれることになった⁽¹⁾。『グローブ』紙の記事が示すのは、ロマン派の文学者たちの中で、アルフレッド・ド・ヴィニー(1797-1863)が社会問題に強い関心を抱き、サン＝シモン主義者たちが提示する社会改革の主張を理解し、それを作品に反映させることができた芸術家として評価されていることである。

『グローブ』紙の記事の日付の時点では、ヴィニーは、多くが『古代・近代詩集』(*Poèmes antiques et modernes*)に収録されている作品および17世紀を舞台とした小説『サン＝マール』(*Cinq-Mars*)によって主として知られた作家であった。その生涯にわたる業績を俯瞰した場合にも、社会性に富んだ詩人という定義は、彼のイメージからは遠いように思われる。

本論考は、この疑問あるいは違和感を出発点として、ヴィニーが当時の社会をどのようにとらえ、それを作品にどのように反映したのかについて考察を加えようとするものである。つまり、ヴィニー作品におけるアンガージュマンの文学としての側面を検討することになるが、その際にサン＝シモンが唱えた「新しい宗教」と「芸術家の役割」という視点を導入する。『劇作家ヴィニー』の著者E・サケラリデスは、サン＝シモンおよびその弟子たちとヴィニーの関係について以下のように記す。

1814年（ママ）、『同時代人に宛てたジュネーヴの一住人の手紙』と題された彼（サン＝シモン）の最初の著作が出版された。

以来、彼は地球の住人たちを道徳的、物質的に導くことのできるような新たな宗教を希求した。そうであるなら、社会の真の先導者たち、すなわち「人類の中で選ばれた人々」は、学者と芸術家ということになる。（…）

サン＝シモンが社会のファクターとしての芸術家の役割について語るのを聞くとき、それはまさにヴィニーの考えを聞いているようである。（…）

サン＝シモンとヴィニーの後に、アンファンタンは知的能力への融資制度の創設を要求した（…）⁽²⁾。

この引用では、ヴィニーはサン＝シモンおよび彼の門弟アンファンタンと関連付けられている。芸術家の役割に関して、サン＝シモンがヴィニーの先駆者と位置づけられ、ヴィニーとアンファンタンの間に類似の考えが存在するという指摘だ。さらに注目すべき点は、サン＝シモンが追求したとされる新たな宗教の創設が、社会変革における重要なファクターとしての芸術家の役割を要請するということだ。本論考では、新宗教の構想と関連づけられた芸術家のアンガージュマンという観点から、作家ヴィニーの思想における「社会性」を考察していく。

サブタイトルにある「脱宗教化」という言葉について一言言及しておく。この言葉であるが、フランス語の laïcisation に対応している。本論文では、この

語の定義をめぐり、L. レタのエルネスト・ルナン研究を出発点とした。L. レタによれば、ルナンの『キリスト教起源史』には「宗教的なものの脱宗教化」(la laïcisation du religieux) の意図が存在する⁽³⁾。『キリスト教起源史』の第一巻目となる『イエスの生涯』が1863年に刊行された際に、宗教界では激的な批判が巻き起ったが、その核心にあったのは「キリストの神性」をめぐらる問題であった。ルナンの著書においては、キリストの神性がメタフォリックなものでしかないことと、仲介者・救済者としての役割が否定され、「信仰のキリスト」が疎外されていることに非難が集中した⁽⁴⁾。人類史におけるイエスの役割の重要性を認める一方で、キリスト・イエスの脱神性化を行うルナン解釈の在り方を、L. レタは「脱宗教化」という語でとらえた。この論争はいわばパンドラの箱を開ける行為に似て、キリスト教をめぐってすでに存在したさまざまな思想の様態が顕在化することになる。本論文では、キリスト教のコンテクストにおける脱宗教化—キリスト教は、無神論も含めて実に様々な在り方が存在するので、「脱キリスト教化」はここでは用語として不適切であろう—という視点に立ち、ヴィニーの著書にこの問題についてどのような記述があるかを拾い上げつつ、分析していく。「サン＝シモン教」と芸術家の使命が緊密に結びついている以上、この視点からの検討が必要であると思われる。

1 サン＝シモン教、芸術家の社会的役割、そしてヴィニー

A. ピコンは、サン＝シモンが宗教と称するものは、超越的な起源をもつ啓示宗教とはまったく異なり、むしろある種の社会組織であると指摘する⁽⁵⁾。P. ミュッツによれば、サン＝シモンが目指していたのは宗教の世俗化であり、合理的宗教、神なき宗教が彼の願いであった。つまり神を「原理」とし、科学法則によって代替されるべきものとした⁽⁶⁾。これらの指摘は、彼の最後の著作『新しいキリスト教』(1825)を考ふるうえで示唆を与えてくれる。この書の中でサン＝シモンは、最も貧しい階級の精神的・物理的生について憂慮し、キリスト教の唯一の、しかし矚目すべきメリットとして弱者への配慮を挙げる⁽⁷⁾。

最大多数の階級の境遇向上を主眼とする社会改革が唱えられると同時に、大革命以降の社会におけるとりわけ貧困層の宗教的無関心を問題視し、キリスト教を代替する新たな宗教の普及が提案されている。そこには、富裕階級や支配者に対して下層階級が暴力に訴えることがないようにとの配慮、今日でいうところの階級闘争を回避しようという配慮も見える⁽⁸⁾。J. グランジュは、『新しいキリスト教』とサン＝シモン主義者たちが師の考えを解釈した『サン＝シモン学説解義』（1830-1831 全2冊）の間には、フリーメイソンやカルボナリズムの影響が介在し、彼らのロマン派的陰影をもつ社会主義的共和主義を特徴づけていると指摘する。『サン＝シモン学説解義』における唯物主義は明白であるが、彼らは社会の新たな組織創設の目的のために、宗教を必要としたのだ⁽⁹⁾。

とはいえ、新たな「宗教」の創設を企図する以上は、教義と組織のみならず儀式が必要となる。そこで、芸術家の役割がクローズアップされる。サン＝シモン自身が芸術家に社会的役割を付与していたことは周知のとおりであるが⁽¹⁰⁾、『新しいキリスト教』の中では、「詩人たちは説教者たちの努力を補佐しなければならない。礼拝のために聖歌隊が歌うにふさわしい詩編を創らねばならない…」とされ、その他の芸術家たち、音楽家、画家、建築家等にもそれぞれ参与が要請される⁽¹¹⁾。弟子たちは師の考えを継承・発展させた。とはいえ、彼らの見解にはさまざまなニュアンスがあり、また時期によっても変遷しており、一様ではない。本論では、知識階級に強いインパクトを与えた1830年の七月革命という社会変動の前後を中心に、サン＝シモン主義者たちの芸術家への呼びかけを確認したうえで、それと関連させてヴィニーの思想を見ていく。

アンファンタンのスポークスマンの存在であったエミール・バローは『芸術家たちへ』（1830）の中で、「…人類の教師たれ。…サン＝シモンから教授すべき内容を学べ」と訴える。バローにおいても、無産の労働者階級の解放および彼らの境遇の改善が、芸術家の専心事項に含まれる⁽¹²⁾。ところで、バローは歴史を、有機的 (*organique*) あるいは宗教的な時代と、それに続いて生起する批判的 (*critique*) あるいは非宗教的時代に分割する。ギリシア・ローマの多神教の時代とキリスト教中世が有機的時代とされ、異教時代は有機的かつ物質主

義的であり、キリスト教中世は有機的かつ精神主義的である⁽¹³⁾。芸術の歴史もこれに対応するかたちで進行する。芸術とは「感動させる力」の多様な表出であるが、社会的かつ宗教的であるときにこそ、力強く健全である⁽¹⁴⁾。しかし、中世芸術とそれに続くルネサンス期の芸術を比較するとき、批判的時代に対応するとされる美の表現のほうを、全般的に見ると私たちはむしろ高く評価していないだろうか。しかし、バローのように、芸術の力を大衆に与える影響力と解釈するなら、大聖堂の美に表象される中世を、芸術の最盛期と解釈することも可能となる⁽¹⁵⁾。さらに、先行する二つの有機的時代が続いて第三の有機的時代が訪れることになる。それは異教の物質主義とキリスト教の精神主義の完全な統合である新たな時代であり、サン＝シモン主義がこれに対応する⁽¹⁶⁾。この来るべき宗教的時代は、「人類のあらゆる進歩によって拡大された神 (un Dieu)」の時代である⁽¹⁷⁾。この歴史観は、『サン＝シモン学説解義』にも見える。「(バランシュの表現を借りれば) いわゆる歴史循環の危機の時代の一つに、私たちが遭遇しているのではないかと考えてみたまえ。そこでは、疲弊した批判的時代から新たな有機的時代への移行がなされる」⁽¹⁸⁾。引用にあるピエール＝シモン・バランシュ (Pierre-Simon Ballanche 1776-1847) は、『社会循環論序説』 (*Essai de palingénésie sociale*) 等の著作で知られる思想家である。『社会循環論序説』の出版と同年の1827年には、ジャンバティスタ・ヴィーコの『新しい学』のミシュレによる訳が出版された。三つの有機的時代という発想については、当時哲学界に君臨していたヴィクトール・クーザン (Victor Cousin 1792-1867) の思想の影響を推察できる⁽¹⁹⁾。すなわちサン＝シモン主義者たちが採用した歴史の循環的運動理論は、当時の思想の諸潮流を広く参照していたことがわかる。

『芸術家たちへ』は、「芸術は礼拝であり、芸術家は司祭 (prêtre) である」という宣言で終わる。一方、『サン＝シモン学説解義』の2冊目では、司祭と芸術家の役割が次のように定義される。

司祭は未来を予見し、人類の過去の運命を未来の運命に連結する規則を

考案する。別の言い方をすれば、司祭は支配する。芸術家は司祭の考えを把握し、それを自らの言語に翻訳する。(…) 芸術家は司祭の考えをすべての人々にとって感知できるものにする。(…) 芸術家を通して、司祭は自らを顕示する。芸術家は一言で言えば、司祭の言葉 (Verbe) である⁽²⁰⁾。

一方「司祭」も、ある意味で「芸術家」である。芸術の定義が「感動させる力」であるなら、説教者の雄弁も芸術の発現と確かにいえるであろう。Ph. レニエによれば、「芸術家」と「司祭」をめぐって、サン＝シモン主義者たちの中で、語彙の定義に錯綜と不一致がある⁽²¹⁾。

これは、教義をめぐってのサン＝シモン主義者たちの間の不一致とも連動している。ヴィニーが最初に交友をもったサン＝シモン主義者は、フィリップ・ビュッシェ (Philippe Buchez 1796-1865) であった⁽²²⁾。ビュッシェは元カルボナリ党の最高責任者の一人であったが、のちにサン＝シモン主義に傾倒する。アンファンタン、バザール、オランド・ロドリゲスと共にサン＝シモンの弟子たちの中で中心的な地位にあった四人の一人だった。教義の流布を目指すサン＝シモン主義者たちは、芸術家たちの協力を必要としていた。ユゴー、サント＝ブーヴなどと同様に、ヴィニーは彼らの説教に足を運んだ一人であった⁽²³⁾。つまり、当時隆盛を極めつつあったロマン派の作家たちが、サン＝シモン主義者たちの動向に強い関心を示していたことがわかる。ところが、サン＝シモン主義者たちの間に分裂が生じる。ビュッシェは、仲間内で進行しつつあったヒエラルキー形成と「教会」の設立に反対し、1829年暮れに友人たちと共に組織から離反する。彼らは、アンファンタンの影響が強くなっていく組織における「神権政治的体制、汎神論的唯物主義、不道德主義」を告発した⁽²⁴⁾。その後、ビュッシェの思想はキリスト教に傾倒していく。彼とその賛同者たちは、キリスト教を「継続的な革命」ととらえた。大革命は福音書の実現であり、フランスこそがキリスト教社会主義のメシア的役割を担うと考えた⁽²⁵⁾。サケラリデスは「ビュッシェは、文明の発展について、福音書の教義と共和主義の主張の関係について、労働者たちの組合の組織化について、自らの考えを再確認

した。これらの考えは、社会の知的階層の中に脈々と流れ込んだ」としている⁽²⁶⁾。1830年9月末にビュッシェとその共鳴者たちはショワズール通りの一角に移り住む。ショワズール通りの彼らの新居は、アンファンタンとバザールという二人の最高教父（le Père suprême）を中心にサン＝シモン主義者たちの中心拠点となったモンシニ通りの旧ジェスヴル館の真向かいに位置していた。新居への引っ越しに合わせて彼らは多くの人々に引越祝いの招待状を出した。この招待客たちの中にヴィニーの名もあり、彼は招待に応じた⁽²⁷⁾。彼は「教会」設立後のアンファンタンとバザールを中心とした集まりには参加を控えたが、ビュッシェやその他の離反者たちとの関係は途絶えてはいなかった⁽²⁸⁾。

本論の冒頭で引用したサン＝シモン教義の機関紙『グローブ』の記事の一節に再び目を移そう。この記事の日付は、1831年6月30日である。つまり、この時期にヴィニーは、『グローブ』紙を発行していたグループとは距離を置いていた。問題の記事は、戯曲『アンクル元帥夫人』（*La Maréchale d'Ancre*）の6月25日のオデオン座での初演を受けて書かれた批評記事である。するとヴィニーへの高い評価はこの劇作に由来するのか、あるいはそれ以外の彼の作品に依拠するのかという疑問が生じる。ヴィニーの劇作家としての業績については後に触れることにし、ここではその他の作品への評価の可能性を検証したい。

『古代・近代詩集』の中に収められた作品を見てみよう。私たちの目を引くのは、1831年1月に書き上げられ、同年4月に発表された詩「パリ」である。「上昇」（Élévation）という副題が付されており、語り手が一人の旅人を伴って、フランスの首都を高みから俯瞰している情景が展開する。「世界の軸」⁽²⁹⁾と「私」が形容するパリは、フランス大革命の震源地である。さらに、1830年の七月革命によってアンリ四世以来続いたブルボン王朝が滅び、オルレアン家による立憲王政が始まってそれほど時間が経過してない頃である。この時期の多様な宗教思想・社会運動を念頭に置きつつ、ヴィニーはフェリシテ・ラムネ、バンジャマン・コンスタンおよびサン＝シモン主義者たちに言及する。この三者が表象する動向は、労働問題や民衆の教化という政治・社会問題と連動して、キリスト教を維持するのか、あるいは破壊しそれを代替する宗教を構築するの

かという極めて19世紀的な問いを内包していた。キリスト教の次に到来する宗教の可能性は、新たな政治体制の問題と相まって、実に多種多様な思索を生むことになる。

そうした宗教運動は、伝統的な実定宗教の在り方への批判あるいは問題視をそもそも出発点としており、新たな社会の動向と連動しようとする意図によって、その在り方は多種多様であるものの、ある種の「脱宗教化」が必然的に図られることになる。ヴィニーはそのことをよく理解していた。サン＝シモンの弟子たちに関連する詩句は以下のとおりである。

… ある広大で普遍の寺院，

そこで人は香も，塩も，血も，パンも，ワインも，ホスチャも奉獻しない。

ただ，自分の時間と仕事に還元された自分の生涯を奉獻する。

ただ，すべての人への愛を，さらに自らと「相続財産」と「国家」を供犠として奉獻する。

ただ一人，父も息子もなく，言葉に従い，

連帯がその目的で，労働がその役割だ。

そして，イエスの後に言葉を発したその人によれば，

すべての人が呼ばれ，すべての人が選ばれる⁽³⁰⁾。

パリを見下ろす「私」の目に、サン＝シモン主義者たちの「寺院」(le temple)が映る。これは、アンファンタンたちが部屋を借りた旧ジェスヴル館を指す。「イエスの後に言葉を発したその人」とは、『新しいキリスト教』の著者サン＝シモンのことである。「香，パン，ワイン，ホスチャ」はキリスト教のミサを示し、「血」と「塩」はユダヤ教と関連する。「血」は生贄の動物の血に対応し、「塩」は「あなたの素祭の供え物はすべて塩をもって味をつけねばならない。あなたの素祭に，あなたの神の契約の塩を欠いてはならない。すべて，あなたの供え物は，塩を添えてささげねばならない」というレビ記(2, 13)を思い起こさせる。これらはユダヤ・キリスト教の宗教儀式に不可欠な諸要素である

が、サン＝シモン主義たちの宗教においては、これらは無用のものとなる。つまり、「奉獻」という行為が宗教を想起させるにしても、それはユダヤ・キリスト教とはまったく異相のものとして、サン＝シモン主義者たちの試みは解釈される。「すべての人が呼ばれ、すべての人が選ばれる」は、「呼ばれる者は多いが、選ばれる者は少ない」という福音書の言葉（マタイ22, 14）のアンチテーゼといえよう⁽³¹⁾。確かにサン＝シモン主義者たちは、自分たちの師をイエスに取って代わる者と考えていた。1831年6月6日の『グローブ』の記事には、イエスとサン＝シモンの対比が見られ、「地上よ、喜べ。サン＝シモンが現れた。…世界を救った十字架よ。今ではお前は世界の重荷だ。消え去れ…」といった記述が存在する⁽³²⁾。血縁関係によらぬ連帯（「父も子もなく」）が称揚されて相続財産が否定され、「労働」を価値基準としつつ成立する共同体が彼らの目的とされる。キリスト教との対立が明確化され、サン＝シモン教の組織に加わろうとする者は、今までの信仰を放棄する旨の宣誓を迫られた⁽³³⁾。

「パリ」のこれらの詩句からまず理解されるのは、バザールとアンファンタンたち一門によって代表されるサン＝シモン主義の重要性を、ヴィニーが十分に認識していたことである。1831年6月30日の『グローブ』紙最終段落にあるヴィニーへの賛辞には、詩「パリ」におけるサン＝シモン主義への言及が関係していると想像される。さらに注目すべきは、1831年5月6日付『グローブ』紙における「パリ」に関する記事である⁽³⁴⁾。詩人は「唯物主義の哲学者」のように懐疑と絶望の叫びを発しているとするコメントがあり、その叫びは「信仰を失った悩める魂の苦しみが生んだ冒瀆の言葉」と定義される。そのうえで、自分たちの「信仰」に合流するよう、誘いかけているのだ。記事は信仰の必要性を説く。

貴方はたぶん我々の政治学を評価しながらも、我々の宗教的性格を否定し、宗教が何の役に立つのかと自問する人々の一人かもしれない。宗教が必要なのは、信念が、愛が必要だからだ。科学、哲学、理性はそれだけでは懐疑と渇きしか生み出さないからだ。

確かに「長いこと世界は闇の中にある」と終わる「パリ」からは、ヴィニーにおける信仰の危機が読み取れる。この詩の創作ノートには、ある旅人への問いかけのかたちで、「君はこのように言うかもしれない。神は世界の歩みに介入しない …/神は存在しないと」、あるいは「君はキリスト教徒かもしれない、類まれなことだが」といった詩句がある⁽³⁵⁾。日記の一節が示すように（「ユリアヌスは超自然の神秘的な世界への『信仰』を擁護したからこそ、偉大であったと私には思われる。それなしには『宗教』は存在せず、地上は唯物主義に陥るだろう…」）⁽³⁶⁾、彼はむしろ唯物主義を警戒していたのであるから、「唯物主義の哲学者のように」という『グローブ』紙の比喻には、サン＝シモン主義者たちの無理解を感じたのではないかと想像される。

一方、ヴィニーの側からは、サン＝シモン主義者たちの「宗教」がどのように見えていたのか。1829年12月の日記の中に次のような一節がある。

サン＝シモンの教義について考える…

彼の弟子たちは多くが能力ある経済の専門家で、芸術家を勧誘するために宗教者を装っている。バザール＝アンファンタンの門弟たちは汎神論者で、人間の個人的〔一語不明〕や魂の行く末については何一つ提供できない。彼らはプラトンよりマルサスのほうをよく知っている⁽³⁷⁾。

ヴィニーはこの引用の直後に、彼らの創設しようとしているのは「哲学的教権政治」であると記している。サン＝シモン主義者たちとの齟齬は明瞭である。とはいえ、サン＝シモン主義者たちからしてみれば、いち早く彼らの社会運動の重要性を認識し、それを自らの詩の中に読み込んだ詩人に期待したのは当然のことだったろう。そして、自分たちの運動への再参入を促したのだ。まして、ヴィニーが離反者たちとの交流を続けていたことを知っている以上、なおさらのことであつたらう。

2 『アンクル元帥夫人』から『チャタートン』(Chatterton)へ

先に見たように、1831年6月30日の『グローブ』紙の記事は、パリで上演が始まったばかりの劇作『アンクル元帥夫人』に関するものである。サン＝シモン主義者たちは、大衆の教化のための演劇の効用に注目していた。この点について、「サン＝シモン主義者たちは教育に寄与する強力な諸要件の一つとして芸術を考えており、演劇に非常な重要性を見出していた」⁽³⁸⁾とサケラリデスは指摘している。ヴィニー自身、読者は本を火に投げ込むことも窓から捨てることもできるが、いったん劇場に足を運んだ多くの観客たちはそこで語られることに耳をふさぐことはできないと、演劇の特異性を解釈していた⁽³⁹⁾。

『グローブ』紙以前に彼らの思想普及のための機関誌であった『生産者』(Producteur 1825 /10 - 1826/10)に「劇作について」という記事がある。そこで執筆者A. ガルニエは「劇場において最も輝かしい成功を収める方法は、今日の新たな道徳的諸観念を示すことだ」とし、劇作家たちに、社会の最新の傾向を考察し、それを劇場で再現するよう推奨している⁽⁴⁰⁾。ここで価値あるものとされているのは、現代劇である。一方、ユゴーの『エルナニ』が上演され、エルナニ論争が巻き起ったのは1830年2月のことであるから、ロマン主義演劇の最盛期が到来しようとしていた時期である。1827年末には、ユゴーの史劇『クロムウェル』が有名な序文を伴って出版された⁽⁴¹⁾。当時ほかにも多くの史劇が創作されたが、過去の出来事は現在を照明するという考えから、歴史は現代を考えるための重要な参照項と位置づけられ、その意味から史劇における「現代性」が認識されていた⁽⁴²⁾。

『アンクル元帥夫人』は史劇に分類される。主人公レオノーラ・ガリガイは、マリー・ド・メディシスの寵臣コンチーニの妻である。ルイ十三世の摂政マリー・ド・メディシスの権力を後ろ盾に、夫とともに富と栄誉をほしのままにしたとされる実在の人物である。夫の元帥がルイ十三世の指示で暗殺された後に、魔術を使って摂政を翻弄したかどで逮捕され、グレーヴ広場で処刑された。

問題の『グローブ』紙の記事では、「もし彼（劇作家）が観衆を過去にいざない、過去の様々の思い出で魅了したいなら、新しい視点からそれらを提示し、観衆の偏見を改めさせ、彼らが最も進歩的な人々に共感を持つようにすることめざすべきだ。この方向性以外では、演劇には未来がない」と指摘している。これはA. ガルニエの「劇作について」にも通じる主張である。つまり、史劇の有用性は否定しないものの、史劇にはある一定の条件が課される。そのうえで、『アンクル元帥夫人』についての次のようなコメントが続く。「ロマン派の概念によれば、これは同派の生んだ最も優れた作品の一つである。しかし、その欠点はまさにロマン派の概念にしたがって制作されたことにある」。サン＝シモン主義の見地からは、ロマン主義の文学理論には「不十分な部分」があるということだ。ただ、『グローブ』紙の記事はそれが何であるか具体的な指摘を欠いている。

彼らがいうロマン派劇の欠点とは何か？『アンクル元帥夫人』の中心的テーマは権力の乱用と腐敗である。これはロマン主義が好んで扱ったテーマの一つであった⁽⁴³⁾。さらに『エルナニ』の例が示すように、禁断の恋あるいは不可能な愛が多くのロマン主義劇を特徴づける。ヴィニーはボルジアという架空の人物をヒロインの初恋の人として作中に登場させる。コンチーニ暗殺のシーンに架空の登場人物ボルジアとの決闘という要素を導入したため、宮中の敵対者たちやパリ民衆から嫌悪された権力乱用の極悪人コンチーニという印象が薄まる結果となっている。さらに、逮捕され連行される妻が夫とかつての恋人の亡骸を目の当たりにするという史実とは異なる設定は、主人公の運命の悲劇性を浮かび上がらせ、私物化された権力への糾弾を弱める。

一方で、ロマン主義劇の特徴である人間の二面性のテーマが浮かび上がる。ヴィニーはヒロインの性格を次のように規定する。「決然として男性的な性格の女性。優しい母で忠実な恋人。メディチ家から学んで、メディチ家風に慎重で本心を表さない。高貴な振る舞いを身につけているが、偽善的などころがある」。ヒロイン像を通じて、善あるは悪に分類しきれない人間の二面性と運命

の悲惨が強調される。サン＝シモン主義者たちの目から見ると、登場人物の大部分が絶対王政時代の為政者たちとその取り巻きである劇であっては、ポスト革命期の時代を照明する歴史の教訓が不明確であるということだろう。

ではロマン主義劇には、大衆教化の意図が全く不在であったのか。サケラリデスによれば、ロマン主義者たちが自らの劇作に付した序文の多くに、演劇の社会的使命の表明が読み取れる。ユゴーの『ルクレツィア・ボルジア』(*Lucrece Borgia* 1833) は、サン＝シモン主義風の作品と解釈できる。その根拠として引かれているのが、「大衆が劇場を後にするときには、なんらかの峻厳で深い教訓を持ち帰るのでなければならぬ」という戯曲の前書きである⁽⁴⁴⁾。それは、演劇には「教化し、称揚し、教えを説く使命」があるとする『グローブ』紙の記事と共通するように思える。ヴィニー自身はというと、「芸術は哲学的寓話であるべきだ」⁽⁴⁵⁾としている。「哲学的寓話」というキーワードをもとに考えたとき、『アンクル元帥夫人』と『ルクレツィア・ボルジア』に共通するのは、人間の二面性に関する思索であろう。相矛盾するように見える性格を併せ持つ人間像は、ユゴーが『クロムウェル序文』で、魂と肉体によって成り立つ人間の特徴として、キリスト教と関連させつつ、近代におけるドラマの核心に据えたものである⁽⁴⁶⁾。二人のヒロインはともに、権力を手中にしたがゆえに権力に翻弄される、あるいは権力により腐敗し悪の権化となり果てた存在だが、一方で自らの命も顧みない崇高な母性愛を体現する女性たちでもある。ユゴーのいう「なんらかの峻厳で深い教訓」は矛盾を含む人間のこの根源的な在り方に関係すると思われる。そうであれば、サン＝シモン主義者たちが考えた「教化」の内容と同一であるといえるだろうか。

とはいえ、ポスト革命期の時代に、サン＝シモン主義者たちであれ、ロマン派の作者たちであれ、共通に意識していたことがある。それは、歴史を進化させる真の原動力とは何かを問いなおし、民衆の決定的な重要性を明瞭にすることである⁽⁴⁷⁾。たとえば『クロムウェル』であるが、「職工たち」(*Les ouvriers*)と題された第5幕では、護国卿の権力を支えるのが民衆であることが強調され

ている。クロムウェルが戴冠式を挙げ王位に就くはずだった「ウエストミンスター寺院の場」には、その装飾を担った職人たちが登場する。ユゴーは親方による搾取を受ける彼らの苦しみに言及する。その一方で、聖書を読むことができる彼らとは異なる、別種の民衆も登場する。ウエストミンスター寺院に向かうクロムウェルの行列を見物する下層民たちだ。「そうだ、数知れないこの民衆（…）/わしの高貴な運命の強力な共犯者のように見えるが/わしが徒刑場に引かれていくときも同じように歓呼するだろう」⁽⁴⁸⁾。それは時には権力に味方するが、時には為政者のコントロールが効かない存在としての民衆である。『クロムウェル』を扱った『グローブ』紙の記事がある（1828年1月26日と2月2日の2回）。特に一回目は「序文」の分析であるが、ロマン主義文学の理論家としてユゴーを容認したうえで、「（…）それ（「グロテスク」le grotesque）は人間性に本来のもので、近代の風俗や様々な信仰から生まれたのであるから、ドラマ（le drame）はそれを排除することはできない」としている。ユゴーはカウンター・カルチャーとしてグロテスクを考え、それが社会の底辺に横たわる民衆文化と共有する自然な親和性を想定した⁽⁴⁹⁾。『グローブ』紙の記事を書いたE. バローは、グロテスクに関するユゴーの主張に賛意を示す。さらに、Ph. レニエの指摘のとおり⁽⁵⁰⁾、魂と物質からなる二面性をもつ人間という新たな人間解釈は、サン＝シモン主義者たちの賛同をえた。とはいえ、実際に創作されたロマン派劇がサン＝シモン主義者たちの理論と完全に歩を一にするものとは限らない。さらに、教義の喧伝の手段としての枠組みは、美の表現である芸術にとって窮屈であるという問題もある。

『アンクル元帥夫人』には、ピカールという靴製造業の親方が登場する。市民軍（milice bourgeoise）の巡査としてコンチーニ暗殺の際に、元帥が合言葉を言えなかったため彼を捕縛した実在の人物である⁽⁵¹⁾。パリ市民の良識を表象する存在として、劇の中では位置づけられている。『グローブ』紙が他のロマン主義者たちと異なり、ヴィニー作品には「社会性」が備わっていると評価した根拠の一つとして、こうした第三身分の人物の導入が関係すると想像するこ

とができるだろう。権力闘争に明け暮れる支配者階級とは別の視点をもたらす役割を果たしているからだ。とはいえ、「彼ら（観衆）が最も進歩的な人々に共感を持つようにすることを目的とすべきだ」とする『グローブ』紙の注文を満たすためには、このブルジョワ階級の人物の重要度は低いといわざるをえない。観衆の注目が主人公レオノーラの悲劇に集中する構図は変わらない。劇作を締めくくるピカールの最後の言葉「そして我々は？」にもかかわらず、支配階級への権力集中への疑義や権力闘争の愚劣さが鮮明になっていない印象がある。サン＝シモン主義の立場からこの劇作を全面的に肯定できない理由は、ここにあるのではないか。

ロマン派の人々の中でもとりわけヴィニーこそが、サン＝シモン主義者たちの新しい詩学を作品において実現したと、『劇作家ヴィニー』の著者サケラリデスは考える。彼女が示そうとするヴィニー像は、サン＝シモン主義者たちの影響を受け、労働者階級の運命にまで強い関心を示す社会派文学者のそれである。そして、その理論がもっとも完成したかたちで具現した作品こそ、戯曲『チャートン』（1834年初演）であるとされる⁽⁵²⁾。

この戯曲は、18歳で自ら命を絶ったイギリスの詩人トーマス・チャートン（1752-1770）という実在の人物をモデルにしている。成功を期待してロンドンに出てきたチャートンは極度の貧しさの中で、餓死する前にヒ素で命を絶つ。ヴィニーはまず小説『ステロ』（*Stello*）の中で、彼の生涯をかなり自由に脚色して主人公とした。若き詩人はジョン・ベルという名の企業家が営むロンドンのある宿舎の住人という設定である。その宿舎は二人の子の母であるベルの妻キティが管理している。夫妻はヴィニーが創造した登場人物である。チャートンは一縷の望みをつないで富裕な貴族に援助を乞うが、彼は下僕としての労働を提案される。つまり、彼は詩人としては完全に否定される。才能がありながらも、芸術家の存在そのものを蔑視するブルジョワ社会の中で認められず、貧困の中で自殺する主人公を通して芸術への無理解、芸術家の悲惨な運命が描かれている。密かに年下の詩人に想いを寄せていたキティは、彼の自殺後に絶

命する。

特筆すべきは、『ステロ』に関してフィリップ・ビュッシェが主幹する新聞 (*L'Européen*) に掲載された評である。

詩的活動と政治活動を分離すること。これがアルフレッド・ド・ヴィニー伯が展開しようとした考えである。これが彼が、彼同様に詩作を生業とする人々に与えようとしたアドバイスである。自らの教訓を力説するため、彼は三人の詩人の例を持ち出す。彼らは政治と関わりをもったために、一人は病院送りとなり、もう一人は服毒自殺し、三人目は断頭台で果てる⁽⁵³⁾。

服毒自殺する詩人がチャタートンである。彼はロマン主義が創造した「呪われた詩人たち」の一人であり⁽⁵⁴⁾、社会から隔絶した孤独な存在である。社会の不公正と無理解の犠牲者であるが、知的エリートであって、それ以外のカテゴリーの社会の犠牲者たちとは一線を画している。他者と共有されえない不幸を抱え込んだ個人が絶望のあまり自殺するというストーリーは、キリスト教の視点からの批判にさらされた。ビュッシェの酷評の理由は、他者との連帯の不在と彼の最期がエゴイズムの帰結と捉えられたことにある。

チャタートンの物語は、戯曲に移し換えられたときに重要な変更が加えられた。一つには、「ノワール博士の第一診察」という副題をもつ小説『ステロ』ではチャタートンの物語は博士によって語られたが、劇ではクエーカー教徒の老人が筋の展開に深くかかわる。つまり、好奇心とイロニーが不在ではないノワール博士の語り、貧しく敬虔なキリスト教徒（「わしはキリスト教徒で、キリストの普遍的共和国の中でも最も純粋な集団に属する」）⁽⁵⁵⁾の視点に転換されている。クエーカー教徒の口を通じて、ジョン・ベルやその他の富裕階級の人々への批判が展開される。さらに劇では、チャタートンは自らを「本作りの職工」 (*ouvrier en livres*) と定義する⁽⁵⁶⁾。「セデーヌ嬢と著作権」⁽⁵⁷⁾の中でもヴィニーは文学者を「本作りの職工」と呼び、その生きる権利と自由を訴え、それと関連して著作権を主張した。詩人はその活動の内容が異なっても、労働に従事す

る者の一人なのである。労働というテーマのもとで、詩人の活動は、サン＝シモン主義の視点からすると他のタイプの諸活動と共通性をもつ⁽⁵⁸⁾。それによって、ジョン・ベルの作業所で彼に搾取されている職工たちと詩人の間に連帯の関係が可能となる。『チャタートン』の第一幕二場には、ジョン・ベルの工場で働く労働者の一団が登場し、仕事の中に機械で腕を怪我して解雇された一人の同僚の職場復帰を懇願するシーンがある。

クエーカー教徒：（一人、ジョン・ベルがやって来るのを見ながら）ほら、怒っている。ほら、金持ちにして幸運な投資家。絵に描いたようなエゴイスト。法的には非の打ち所がない人物。

ジョン・ベル：（…職工たちに向かって、怒って）とんでもない、とんでもない！—お前たちはもっと働くんだ。それだけのことだ。

一人の職工：（同僚たちに向かって）そして、お前たちはもっと稼ぎが減るんだ。それだけのことだ。

ジョン・ベル：どいつがしゃべったんだ。わかったら、あいつと同じように、ただちにくびだ。

クエーカー教徒：よく言った、ジョン・ベル！おまえは、臣下に囲まれた王さながらにご立派だ。⁽⁵⁹⁾

「最大多数の最も貧しい階級の道徳的、物理的、知的運命の向上」は、サン＝シモン主義の機関紙となった『グローブ』紙の標語にあるテーゼだ。職工たちはこの場にしか登場しないが、こういったシーンの挿入は、ビュッシェの批判に答えるものとなっているように思われる。ジョン・ベルは、ヴィニーが「我々の利己的で物質的な社会」（notre égoïste et matérielle société）⁽⁶⁰⁾と呼ぶものの表象である。

一方で、M. ジョルジャンが指摘する通り、チャタートンはロンドン市長に庇護を願い出るが、それは芸術家と権力の関係、他の労働者たちのケースでは想定できない芸術家のある種の特権を明示している⁽⁶¹⁾。彼の自殺は、詩人と

しての存在を否定され、下僕の職を提示されたことによる強い屈辱感に起因する。これは、職工たちの状況とは別種のものであろう。ヴィニー自身、創作ノートの中で、「有産の産業従事者は自分の財産を増やすために、無産の産業従事者である職工の賃金をカットするが、少なくとも、食い扶持は与える。詩人にはそれがない」と記している⁽⁶²⁾。ここで問題となっている無産者 (prolétaire) という新しいコンセプトは、サン＝シモン主義者たちの理解していたところでは「最大多数の最も貧しい階級」を意味し、彼らの抱いていた構図は、「勤労者」(travailleurs) と「有閑者」(oisifs) の対立という古典的なものだった⁽⁶³⁾。ヴィニーの考えも、その域を出ていない。詩人は、後者のカテゴリーにも入りうる。創作ノートによれば、怪我して失業した職工トビーがチャタートンから金を奪ったうえで殺害するというストーリーが構想として存在した。それは無教育の人間にあっては、絶望は殺人にいきない、詩人では自殺にいたるという発想による⁽⁶⁴⁾。この筋は最終的には放棄されたものの、他の職工たちとの連帯の意識が劇作中でそれほど明瞭ではない背景とも考えられる。「『チャタートン』は彼ら(文筆家たち)の地位を高める。そして、物質的で、ブルジョワ的で、産業家流で、計算高く、強欲で、蓄財に励む利己主義に抗議する」とヴィニーは後年の日記に記すが、「ブルジョワ階級のことは念頭になかった」とも付け加えている⁽⁶⁵⁾。つまり、労働者階級の悲惨な現実と、それを放置する社会の在り方への問題意識はもってはいるものの、階級間の抗争という意識は不在だったということだ。この数行が書かれたのは1862年で、『レ・ミゼラブル』出版の年である。ユゴーも階級闘争の観念は排除しているが、小説の中でブルジョワジー批判を展開したという点では、ヴィニーとは異なる。

3 『ダフネ』におけるサン＝シモン主義者たちへの言及

「ノワール博士の第二診断」の副題をもつ『ダフネ』はヴィニーの死後約50年後の1912年に、パリのフランス国立図書館に保存されている草稿をもとに、

フェルナン・グレグによって雑誌『ルヴュー・ド・パリ』（*Revue de Paris*）に発表された。翌年に単行本として出版された80ページほどの中編小説である。入れ子形式の小説で、ステロとノワール博士が登場するパリの情景に始まり、ローマ皇帝ユリアヌスの時代の描写が挿入された後、最後に二人が再登場して終る。大革命をへてキリスト教が弱体化し、宗教への無関心や反感が広がりを見せた時代において、キリスト教を代替する宗教の可能性はあるのか。ヴィニーは小説『ダフネ』において、「脱宗教性」の問題を取り上げ、その中心テーマとした。七月革命以降の自らの人生を「私の生涯で最も哲学的な時期」⁽⁶⁶⁾と定義するヴィニーは、哲学的視座から宗教についての思索を展開することになる。

その問いへの答えが、『ダフネ』の結論部分に示される。サン＝シモン主義者たちへの言及が見いだされるのは、この箇所である。

彼ら（ノワール博士とステロ）は（…），仮面をつけず奇妙ないでたちをした男たちの集団が通るのを見た。美貌の青年たちで、胸に名前が刻まれていた。この者たちはサン＝シモンという名の男を崇拜していて、新たな社会を構築すべく、新たな信仰を布教していた。

群衆たちは彼らに石を投げつけ、嘲笑した。

それだけではなかった。彼らはもっと不吉なものを見た。それは一人の司祭で、先ほどの若者たちを追ってやってきて、次のように言った。「あなた方に仕えよう、あなた方を模倣しよう」。「王たちは頭蓋骨の容器に入った血をすする。司祭たちは、富と名誉と権力が喉までこみ上げて窒息しそうだ。民衆は彼らを打倒せねばならない。（…）」。「あなた方のためにサン＝シモン主義の『黙示録』をしたためよう。それは憎しみの書となるだろう」。

群衆は彼の言葉を聞き、嘲笑した⁽⁶⁷⁾。

「仮面をつけず」という描写は、当日が謝肉祭期間の最終日の「謝肉の火曜

日」であることに対応する。「奇妙ないでたち」とは、サン＝シモン主義者たちの制服を示唆している。ヴィニーがサン＝シモン主義者たちの社会改革プログラムから距離を置くようになったのは1840年のことであり、『ダフネ』の結論部分書かれた1837年においては、彼はまだサン＝シモン主義者たちにそれなりの評価を与えていたとされる。つまり、「群衆たちが石を投げつける美貌の青年たち」という表現からは、群衆の無理解に遭遇する彼らに対するヴィニーの同情的な視点が看取されるというのだ⁽⁶⁸⁾。ヴィニーは1832年の日記に次のように書く。

サン＝シモン主義者たちの喜劇は、グロテスクな仮装行列に終わった。しかし、自分たちの思想の持続性について思い違いをしたものの、彼らはその普及に尽力した。

最大多数の階級の生活の改善、さらに無産者の「能力」と所有者の「相続権」の調整が、まさに今日の政治の課題である⁽⁶⁹⁾。

にもかかわらず、彼らの努力は実ることなく、サン＝シモン主義者たちの「宗教」は広く民衆の受け入れるところとはならなかった。これが『ダフネ』の結論である。

彼らに続いて登場する一人の司祭は、明らかにフェリシテ・ラムネを指す。ところで、サン＝シモン主義者たちの活動にラムネが触発されたとまでは仮定できるだろうが、彼をサン＝シモン主義者たちの追隨者あるいは模倣者とみなす解釈には明らかに無理がある。エミール・バローは1830年12月14日の『グローブ』紙上で、次のようにラムネについて述べている。

布教活動を完遂するために、ついに貴方は教会のヒエラルキーを侵犯せざるをえなくなった。司祭たちは、貴方の声に耳を貸さないだろう。司祭たちは給与をもらうことに満足し、従属や退廃さえも受け入れるだろう。(…) 今日におけるカトリシズムの唯一の功績は、貴方のような勇気ある

司祭を生み出したことだ。メストルとシャトーブリアンの雄弁を受け継いだ貴方の天才は、(…) カトリシズムの断末魔を少しく和らげることだろう。

この引用からはラムネとサン＝シモン主義者たちの対立の構図が明らかである。この時期のラムネはメストルとシャトーブリアンの系譜に属する伝統主義者であり、教皇権至上主義者であった。彼は当時、『未来』(L'Avenir) 紙を主幹し、キリスト教の再興を図るとともに、それを新しい時代にふさわしい政治体制構築と連動させようとしていた。『未来』紙において、「貧しい民衆は、貧しさを分かちあうのでなければ、司祭を敬愛しない」と述べて、聖職者を国家の公僕の状態に置く政教条約の破棄を唱えて、フランスカトリック教会上層部を震撼させていたことも事実である⁽⁷⁰⁾。一方、ラムネはキリスト教の復興に心血を注いでいたのであり、カトリック教会組織に離反する意図は当時は抱いていなかった。この時期のラムネの政治的活動は、サン＝シモン主義者たちの“宣教活動”といわばライバル関係にあったといえるだろう。七月革命後のラムネを、ヴィニーは「パリ」において次のように描写する。

ローマの意に反してローマに尽くす貧しく力ある司祭
 崇高な「死体」は、その不死の釘から
 祭壇に血を滴らせることはもうない
 無だ…眠りについたその耳は
 新たなエレミヤの嘆きを聴くことはないだろう⁽⁷¹⁾

ヴィニーはラムネを預言者エレミヤに喩え、教皇を中心としたカトリック信仰の復興に尽力するラムネの努力を、不毛なものとして否定した。ヴィニーのラムネ観は、バローのコメントと符合しているように思われる。

ラムネの転機は、1832年に訪れたと考えることができるだろう。同年にラムネの思想は教皇勅書「ミラーリ・ヴォス」によって糾弾された。さらに1834年に出版された『信者の言葉』(Paroles d'un croyant) は、新たな勅書「シング

ラーリ・ノス」によって教皇の咎めを受けることになる。1836年には、教皇庁を激烈な調子で非難したラムネの著書『ローマの事々』(*Affaires de Rome*)の出版が、カトリック教会との断絶を決定的なものとした。『信者の言葉』や『ローマの事々』における攻撃の調子は、ラムネの激しい性格を反映しているのだが、それが『ダフネ』における「憎しみの書」というヴィニーの表現につながっているのだろう。『ダフネ』は三部作になる予定だったが、日記等からその構想を見ていくと、ヴィニーがずっとラムネに関心を抱き続けていたことがわかる。ラムネはサン＝シモン主義者たちとは異なり、新たな宗教的組織を作ろうとする意図は持たなかったが、新たな宗教の在り方を模索した一人だった。1837年の日記には、明らかにラムネを下敷きとした登場人物について、「おお、ラミュエル、あなたは自分を宗教者と思っていたが、違う。あなたは哲学者だ。一もし真の宗教者であったなら、十字架の足元にとどまっていたはずだ」というくだりがある⁽⁷²⁾。確かにラムネの思想は、原罪とキリストの死による贖罪を否定し、「福音書の師」を人類の表象とするにいたる。彼が四福音書を自ら翻訳し長い注釈をつけて出版した『福音書』には、民衆の先頭にたつ革命家イエスが浮かびあがる。また彼は、『哲学の素描』(*Esquisse d'une philosophie* 1841-6)を上梓する。1844年、ラムネが『哲学の素描』の出版(全4巻)を続けていた時期、ヴィニーは皇帝ユリアヌスとラムネを関連づけて次のように記している。

古代と近代の二つの主要な宗教は二つの同様な曲線をたどっているように思われる。

四世紀において多神教は衰退しつつあった。多神教は再興のために、折衷的で理神論的なアレキサンドリア学派の哲学に逃避しようとした。(…)

ところが、このアレキサンドリア学派は、当時の時代に適合し、それと共に歩もうとしたために、半ば宗教である中途半端な哲学となり、同時に、半ば哲学である中途半端な宗教となってしまった。

シュトラウスは、キリスト教の「理念」を救うために、物語を犠牲にす

ることを望んだ。ラムネは自らの神権政治を救うために、それを七月革命の民衆運動に依拠させようと望み、彼のキリスト教を哲学と人間理性に立脚させようとした。彼の教義はそこで自らを見失い、彼の哲学は教義であらんとして損なわれてしまった⁽⁷³⁾。

つまり、ヴィニーはこの時期のラムネの思想が脱宗教化し、その結果として「中途半端な宗教」になってしまったうえに、哲学としても不完全なものであると指摘しているのだ。サン＝シモン主義者たちとラムネの関連付けは、この脱宗教化の問題と関連しているように思われる。

この小説にも一人の職工が登場する。彼はジャン・ロワールという名の旋盤工である。1831年2月14日から15日にかけてパリ大司教館襲撃事件が起き、ノートルダム大聖堂の裏手にあった大司教館の図書館では大量の蔵書が破られ、窓からセヌ川へ投げ捨てられた。『ダフネ』はこの史実を背景としている。三人の子を連れた職工は、セヌ川から拾い上げた古書をノワール博士に売りつけようとする⁽⁷⁴⁾。ここには、書籍が表象する知へのアクセスをめぐる二つの階級の深刻な分断がある。さらに「『ダフネ』の結末」と題された部分にある以下の次のくだりは、ジャン・ロワールとの遭遇が下敷きとなっている。

二人（ノワール博士とステロ）とも、12世紀の「蛮族」（les Barbares）が引き起こした出来事（アレキサンドリア図書館の焼き討ち）について13世紀に書かれた見事な記述を、むさぼるように読んだ。しかし、読み続けることができなくなった。なぜなら残りの三百ページは、今日遭遇した19世紀のパリの蛮族たちによって引き裂かれていたからだ⁽⁷⁵⁾。

注目されるのは、パリの民衆がローマ時代の蛮族たちに比されていることだ。『ダフネ』は入れ子細工になっているため、この比較は小説の構造と当然ながら関係する。一方で、ヴィニーが参照した可能性があるのが、1832年に出版されたサン＝シモン主義者たち説教集（*Prédications*）である。P. ミッシェルの指

摘のとおり、革命後の無産階級を「新たな蛮族たち」と形容する箇所を含むE. バローの説教が行われたのは、1830年11月である。そこでは「出自によるあらゆる特権が例外なく廃止され、能力による序列化」が準備され実現するときこそ、19世紀の蛮族の脅威が解消するとの主張が見える⁽⁷⁶⁾。それに先立って10月にはすでに、別の説教者が労働者階級を蛮族に譬え、「労働者階級！彼らこそが封建社会の廃墟の上に新たな支配を確立することになるだろう。しかし、彼らは（…）スキティアの砂漠からやって来るのではなく、（…）作業場や田畑から抜け出てくる。今ここで彼らは、無知と貧困にあえいでいるのだ（…）」⁽⁷⁷⁾としたりが存在する。サン＝シモン主義者たちの説教よりもっと多くの読者にこの比較を広めたと想像されるのが、1831年12月8日に『デバ』(*Journal des Débats*)紙に掲載されたサン・マルク・ジラルダンの記事である。「社会を脅かす『蛮族』は、コーカサスや中央アジアのステップにいるのではない。彼らは我々の工業都市の市外にいるのだ」という一節は、同年のリヨンの絹織物職人たちの反乱の後の強い危機感を背景に執筆された。この記事でも念頭に置かれているのは、リヨンの絹織物職人のような労働者たちであって、筆者が« *populace* »と呼ぶ下層の烏合の衆ではない。著者はリヨンの騒乱をハイチのサン＝ドミンゴで起きた奴隷反乱と同一地平に置く。つまり、都市の労働者と植民地の奴隷が比肩されているのだ。当時の社会の深刻な分断が理解される一方、著者が主張するのは次の点である。「有産階級と無産階級の間を超えることのできない障壁を設けるのは、残虐であり横暴である」。すべての者が容易に産業に携わり、所有に到達できることなしには、社会の安定はないと著者は警告する。当然のことながらブルジョワ階級の危機意識と自己防衛の必要性の自覚が前面に出ており、その視点からは、労働者階級は流血を伴う革命を引き起す可能性のある危険な人物たちである。

おわりに

サン＝シモン主義者たちやラムネのケースから知りえるように、19世紀にお

ける新たな宗教の希求は、新しい時代に適合した政治体制や社会の構築の模索と連動していた。J. グランジュは、『サン＝シモン学説解義』では、反教権主義とユートピア社会主義に固有の世俗化されたキリスト教が混合され、表現されており、「サン＝シモン教は（…）、社会と政治の組織化（相続に関する法、金利生活の禁止など）によって、友愛と利他心のキリスト教的メッセージを実現する」とする。しかし、それはキリスト教神学と神の超越の排除を前提としているのだ⁽⁷⁸⁾。一方、ヴィニーは宗教のこうした変容の可能性を拒否する。すでに見たように、彼はサン＝シモン教を「哲学的教権政治」に過ぎないとしたが、宗教は哲学に歩み寄ることによって、別の言い方をすれば、脱宗教化を被ることによって、崩壊すると考えた。なぜなら彼にとって宗教とは、「声になれば祈りとなり、信仰の対象に哀願し感謝を捧げ、天上的な存在が現存することへの希望によって息吹を与えられ、崇拜の対象が現に存在することを信じる愛」⁽⁷⁹⁾によってしか成り立たないからだ。自らは哲学に依拠しつつ、新たな信仰としての芸術を企図しながらも、彼は新たな宗教の創設を否定する。

そのことは、彼が社会問題に目を向ける際の立ち位置とも関係しているように思われる。私たちは、ヴィニーが社会問題に非常に強い関心を持ち、労働者たちの存在を意識して作品の中に登場させていたことを確認した。ただし、彼は、政治的な主張の手段として労働者たちを描いたのではなかった。『チャタートン』には政治的意図が認められるようにも思われるが、先に見たように1862年の日記では、『チャタートン』の再演の折に、ブルジョワジー批判の目論見はなかったとしている。つまり、階級間の緊張関係に危機感を持っていたが、それを解決しようとする意識は希薄だったというのだ。とはいえ、社会正義の観念が表明されていることは否定できないし、七月革命直後の時代を考慮するとき、そこから30年を経た感想が必ずしも彼の当時の心境と対応しているかは疑念が残るのも事実だ。

一方、『チャタートン』の初演と同年の1834年に発表されたユゴー『クロード・グー』と比較するとき、我々は両者の差異を感じざるをえない。この小説は実話に基づいているが、社会問題小説であって、現実が大幅に改変されてい

る。「パリの蛮族」の一人であるゲーは盗人であり、殺人者でもある。ただし、民衆に潜在する潜在可能性の表現として描かれている。その意味で、ユゴーの創造した労働者は政治的意図を担っているがゆえに理想化されており、現実から遠い。ヴィニーの旋盤工と比較するとき、台頭しつつある新しい階級へのまなざしが、その差異を生んでいるように思われる。

三部作を想定していた『ダフネ』の構想では、ロワールがラムネを想起させる登場人物ラミュエルを殺害するというストーリーが存在した⁽⁸⁰⁾。「ラミュエル」は、ラムネとエマニュエル(=キリスト)を合成した語であり、社会変革を企図した宗教者として登場する予定だった。「支配者のための宗教」を脱皮して民衆へと向かおうとし、政治的改革を実現しようとした司祭が一労働者によって命を失うという設定は意味深長である。先に見たように、ラムネの思想は革新を希求する社会運動の中で、脱宗教化していく。ヴィニーはサン=シモン主義者たちの試みと同様に、こうした動向の成功も信じていない。となれば、キリスト教を代替する宗教創設の試みと不可分に結びついた芸術家の役割も、曖昧なものにならざるをえなかったといえるだろう。

註

- (1) 『グローブ』紙の記事は、フランス国立図書館 RetroNews のサイトから入手。『グローブ』がサン=シモン主義の新聞であった時期は、1830年11月11日から1832年4月20日までである。
- (2) Emma, Sakellaridès, *Alfred de Vigny, auteur dramatique*, Paris, Librairie de la Plume, 1902, pp.195-196. 『同時代人に宛てたジュネーヴの一住人の手紙』の出版年であるが、1802年である。日本大学図書館法学部分館が所蔵するサン=シモン・コレクションの Part II は、エマ・サケラリデスが1902年から1908年の間に執筆したと推定される未刊行の研究書の草稿である。そのタイトルは「サン=シモン主義者たちとロマン主義者たちとの知的関係」(*Les Rapports intellectuels des Saint-Simoniens avec les Romantiques*) となる予定であった。序論の後に十一の章が確認され、「サン=シモン主義者たちによる芸術家の使命」、「サン=シモン主義者たちの主張」、「オーギュスタン・ティエリー」、「サント=ブーヴ」、「アルフレッド・ド・ヴィニー」、「アルフォンス・ド・ラマルティエヌ」、「ヴィクトール・ユゴー」、「ジョルジュ・サンド」、「ピエール=ジャン・ド・ベランジェ」、「ジュール・ミシュレ」、「エドガール・キネ」である。ヴィニーとサン=シモン主義の関係については、

実際の接点や直接的な影響関係を考察しているので、一部参照した。サケラリデスも、冒頭に挙げた『グローブ』紙の記事を引用している。本草稿はPDF版のかたちでの閲覧が可能である。

- (3) Laudyce Rétat, *Introduction à l'Histoire des origines du christianisme*, Paris, Robert Laffont, 1995, t. I, p.II.「脱宗教化」については、拙論「ヴィニー『ダフネ』における「脱宗教性」」（『キリスト教文学研究』第37号，2020年4月，pp.62-73を参照されたい）。
- (4) *Ibid.*, p.XXXV.
- (5) Antoine Picon, « La religion saint-simonienne », *Revue des sciences philosophiques et théologiques*, 2003, t.87, p.26.
- (6) ピエール・ミュッソ著『サン＝シモンとサン＝シモン主義』，杉本隆司訳，白水社，2019年，40，45頁。
- (7) Saint-Simon, *Nouveau christianisme, Dialogues entre un conservateur et un novateur, Œuvres complètes*, PUF, 2012, t. IV, p.3185. サン＝シモンの最後の著作とされる『新しいキリスト教』であるが，多様な解釈が可能である（pp. 3169-3147）。
- (8) *Ibid.*, pp.3218-3219.
- (9) Juliette Grange, « Contexte de rédaction et place dans l'histoire des socialismes » in *Exposition de la Doctrine de Saint-Simon*, éditée par J. Grange et P. Musso, Lormont, Le Bord de l'eau, 2020, p.51.
- (10) P. ミュソー，前掲書，98-99，109頁。
- (11) *Nouveau christianisme*, p.3210.
- (12) Émile Barrault, *Aux artistes. Du passé et de l'avenir des beaux-arts*, Alexandre Mesnier, 1830, p.76. 最初に発表されたのは，1829年である。
- (13) *Ibid.*, pp.12-13.
- (14) *Ibid.*, p.73.
- (15) Philippe Régnier, « Les Saint-Simoniens, le Prêtre et l'Artiste », *Romantisme*, 1990, n° 67, p.35. Ph. レニエによれば，バローの芸術論は多面的であり，有機的時代と批判的時代に対応する芸術の諸価値も複雑に交錯している（p.40）。
- (16) *Ibid.*, p.36.
- (17) E. Barrault, *op.cit.*, p.76.
- (18) *Doctrine de Saint-Simon, Exposition, 1^{ère} année, 1829*, Paris, Au bureau de l'Organisateur, 1830, p.268.
- (19) Ph. Régnier, *op.cit.*, p.36.
- (20) *Doctrine de Saint-Simon, Exposition, 2^e année, 1829-1830*, Paris, Au bureau de l'Organisateur et du Globe, 1830, pp.125-126.
- (21) Ph. Régnier, *op.cit.*, p.38.
- (22) Pierre Flottes, *La pensée politique et sociale d'Alfred de Vigny*, Genève, Slatkine Reprints, 2012 (réimpression de l'édition de Paris, 1927), p.64.

- (23) Léon Séché, *Le Cénacle de la Muse française 1823-1827*, Paris, Mercure de France, 1908, pp.268-269.
- (24) *Le siècle des saint-simoniens, du Nouveau christianisme au canal de Suez*, Paris, BNF, 2006, p.50.
- (25) Frank Paul Bowman, *Le Christ des barricades*, Paris, Cerf, 1987, p.196.
- (26) サケラリデス草稿, p.133.
- (27) 同上, pp.132-133.
- (28) *Stello, Œuvres complètes*, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1993, t. II, p.1480 (*Stello* に付された注による)。P. ベニシューの指摘のとおり, ビュッシェやその共鳴者たちとの関係も, 1830年においてビュッシェと2, 3度会っているのが確認できるとはいえ, 書簡などの資料からは多くを知りえない (Paul Bénichou, *Les mages romantiques*, Paris, Gallimard, 1988, p.136)。とはいえ, ヴィニーがサン＝シモン主義者のプロスペール・ロベールに宛てた手紙からは, 彼がサン＝シモンの思想に興味を持っていたことがわかるし, また1830年3月18日にビュッシェがヴィニーに宛てた書簡によると, E. バローの『芸術家たちへ』は, プロスペール・ロベールを通じてビュッシェからヴィニーに手渡されたことという事実も明らかである (Alfred de Vigny, *Correspondance*, Paris, Classiques Garnier, t. I, pp.359, 417-418)。
- (29) « Paris », *Poèmes antiques et modernes, Œuvres complètes*, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1993, t. I, p.107.
- (30) *Ibid.*, p.109.
- (31) *Ibid.*, p.1028 (詩「パリ」に付された注による)。
- (32) セバスティアン・シャルレティ著 沢崎浩平他訳『サン＝シモン主義の歴史』, 1886年, 法政大学出版局, 97頁。
- (33) Francis Démier, « Les saint-simoniens à la rencontre des ouvriers parisiens au tournant des années 1830 », in *Actualité du saint-simonisme*, colloque de Cerisy, sous la direction de Pierre Musso, 2004, Paris, PUF, p.174.
- (34) P. Flottes, *op.cit.*, p.86に指摘がある。本論では, 『グローブ』紙の主張を別の角度から分析した。
- (35) Esquisse de « Paris », « Bibliothèque de la Pléiade », 1993, t. I, p.271.
- (36) Vigny, *Journal d'un poète, Œuvres complètes d'Alfred de Vigny*, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1948, t. II, p.1289.
- (37) *Ibid.*, p.900.
- (38) サケラリデス草稿 p.139。
- (39) « Lettres à Lord*** », *Œuvres complètes d'Alfred de Vigny*, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1993, t. I, p.397. « Lettres à Lord*** » は『オセロ』を訳した戯曲『ヴェニスのモール人』 (*Le More de Venise*) の出版の際の前書きである。一方でヴィニーは, 劇作は哲学的思索を展開するには不適切であるとも, 述べてい

- る（p.399）。
- (40) Adolphe Garnier, « De l'art dramatique », *Producteur*, t.2, 1826, pp.605-606.
- (41) この戯曲は古典劇の三単一の法則へのアンチテーゼとして構想されていたこともあり非常に長大な作品となり、上演されることがなかった。
- (42) これは、シャトーブリアン『革命試論』（*Essai sur les révolutions*）にある考えと一致する（Annie Uberfeld, *Introduction à Hugo Cromwell*, GF-Flammarion, 1968, p.19）。
- (43) Marie-Christine Moreau, *Chatterton et le drame romantique*, CRDP Midi-Pyrénées, 1996, p.104.
- (44) *Préface de Lucrece Borgia*, *Œuvres complètes*, « Théâtre I », Paris, Robert Laffont, 1985, p.973.
- (45) 『アンクル元帥夫人』の序文（p.625）。
- (46) Hugo, *Préface de Cromwell*, *Œuvres complètes*, « Critique », Paris, Robert Laffont, 1985, p.16.
- (47) Annie Uberfeld, *Introduction à Hugo Cromwell*, GF-Flammarion, 1968, p.22.
- (48) Hugo, *Cromwell*, *Œuvres complètes*, « Théâtre I », Paris, Robert Laffont, 1985, pp.294-295, 299, 340 et 346.
- (49) Anne Ubersfeld, *op.cit.*, p.65.
- (50) Philippe Régner, *Les idées et les opinions littéraires des Saint-Simoniens (1825-1835)*, thèse pour le doctorat du 3^e cycle (sous la direction de M. R. Fayolle, année universitaire 1982-1983), p.161.
- (51) *La Maréchale d'Ancre*, pp.1446-1447（『アンクル元帥夫人』に付された注による）。
- (52) サケラリデス草稿, pp.141-142（「それはおそらくロマン派が実現した最も見事な作品であり、当時の哲学的思索の最も見事な表現であった。というのも我々はチャタートンを、あらゆる社会的悲惨の表象と見なすことができるからだ。彼は単に芸術家の上にだけでなく、女性や労働者の上に、『幸福な者たち』のエゴイズムが生み出したあらゆる犠牲者の上にのしかかる、社会的悲惨の表象であるからだ」）。
- (53) *L'Européen, journal des sciences morales et économiques* (le 28 avril 1832). フランス国立図書館 Gallica のサイトより入手。『ステロ』には獄中の息子の運命を憂慮するアンドレ・シェニエの父の様子を表現して「彼は、ある幸運なる有機的時代において尋問中の犯罪者が判事を見つめるように、私を見つめた」とノワール博士が語るシーンがある（*Stello*, p.571）。P. ベニシュエの指摘（P.Bénichou, *op.cit.*, p.137）によれば、*L'Européen* の記事の執筆者はこのくだりに有機的時代に関するヴィニーの否定的見解を読み取った。
- (54) Marie Christine Moreau, *op.cit.*, p.97.
- (55) *Chatterton*, *Œuvres complètes d'Alfred de Vigny*, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1993, t. I, p.797.
- (56) *Ibid.*, p.788.

- (57) « De Mademoiselle Sédaine et de la propriété littéraire – Lettre à Messieurs les députés », *Mélanges, Œuvres complètes*, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1993, t. II, p.1195. 1841年1月15日に『両世界評論』に掲載された論文。著作権に関する議論が1月18日に国民議会で審議されるのを念頭に書かれた。作家を父にもったセデーヌ嬢が、父の死後に遺族手当を打ち切られて貧窮状態にあったことが背景にあった。
- (58) Maxime Georgen, « Le saint-simonisme et l’au-delà du littéraire : l’exemple de Chatterton », in *Actualité du saint-simonisme, colloque de Cerisy, sous la direction de Pierre Musso*, 2004, Paris, PUF, pp.311-312.
- (59) *Chatterton*, pp.765-766.
- (60) Esquisses concernant *Chatterton, Œuvres complètes d’Alfred de Vigny*, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1993, t. I, p.865.
- (61) Maxime Georgen, *op.cit.*, p.318.
- (62) Esquisses concernant *Chatterton*, p.865.
- (63) Francis Démier, *op.cit.*, pp.169-170.
- (64) Esquisses concernant *Chatterton*, pp.838-839.
- (65) *Journal d’un poète*, p.1373.
- (66) *Ibid.*, p.960.
- (67) *Daphné, Œuvres complètes d’Alfred de Vigny*, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1993, t. II, pp.979-980.
- (68) *Ibid.*, p.1635. 『ダフネ』に付された編者 A・ブーヴェの作品解題による。
- (69) *Journal d’un poète*, p.968.
- (70) 拙著『「神」の人 19世紀文学における司祭像』（国書刊行会，2015年，pp.13-25）を参照されたい。
- (71) « Paris », p.108.
- (72) *Journal d’un poète*, p.1058.
- (73) *Le Journal d’un poète*, pp.1224-1225. ヴィニーは360年の代わりに300年，四世紀の代わりに三世紀としているが，明らかな誤りである。
- (74) *Daphné*, pp.906-907.
- (75) *Ibid.*, pp.979.
- (76) Pierre Michel, *Un mythe romantique Les Barbares 1789-1848*, Lyon, Presses universitaires de Lyon, 1981, pp.261-262. E. Barrault, « Les Femmes », *Prédications*, 1^{ère} partie, *Œuvres de Saint-Simon et d’Enfantin*, Paris, Ernest Leroux, 1877, t. 43, pp.220.
- (77) P.-M. Laurent, « L’Etat et l’Europe », *Prédications*, pp.179-180.
- (78) J.Grange, *op.cit.*, p.52.
- (79) *Daphné*, p.963.
- (80) *Journal d’un poète*, p.1056.

本論文は学術振興会科研費（基盤研究C 17K02604）を得て、執筆されたものである。

